

更田時蔵の旧・大谷公会堂

— 旧・大谷公会堂を中心にした更田時蔵の仕事について

佐藤 公紀

03

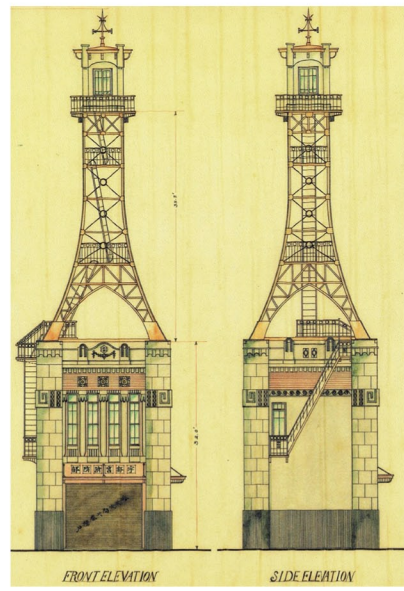
宇都宮市大谷町に残る「旧・大谷公会堂」は、大谷石造の洋風建築として、国登録有形文化財（登録番号 09-0087）となっている。本稿では、その建造の経緯や特徴、及び設計者である更田時蔵の経歴、その他の仕事を紹介するとともに、旧・大谷公会堂が建てられた時代における宇都宮の建造物、同時代の代表的な建築を俯瞰し、当時の宇都宮の都市空間について考えてみる。

1. 更田時蔵の経歴について^{註1)}

更田時蔵は、1893（明治26）年、鳥取県東伯郡松崎村（現・湯梨浜町）で木材業を営む更田源太郎の三男として生まれた。

1911（明治44）年、この年に創設された早稲田工手学校（現・早稲田大学芸術学校）の第1回生として入学し、佐藤功一の教えを受ける。卒業後、飯田徳三郎設計事務所（東京市本郷）で建築設計・施工を学び、その後、栃木県内務部土木課建築係に勤務した。1919（大正8）年には神戸電気局電気事業拡張工事に転じ、発電所、変電所、運輸事務所本館の設計・監理を担当した。ここでは、当時の同僚だったアメリカ人技師に設計指導を仰ぎ、耐震・耐火建築物の設計に自信を深めていった。

1919（大正8）年、元・栃木県土木部長の川崎



参一郎が宇都宮市長に就任するや否や、更田時蔵の誠実で卓越した技術に着目、市長の再三の懇願を受けて、宇都宮市の設計主任に着任した。そして、その頃は木造建築が主流だった市の施設を、次々と鉄筋コンクリート造に建て替えていった。1923（大正12）年に更田建築事務所（現・株式会社フケタ設計）を創業し、関東大震災後の京浜地方の震災復興業務に数多く携わる。それが一段落した後は、県内を中心に、さまざまな建築に携わった。

1961（昭和36）年、栃木県内における建築設計の技術向上の功績により、黄綬褒章を賜る。

1. 飯田 実《更田時蔵氏之像》
1966年
フケタ設計蔵 [KOS]
2. 更田時蔵《宇都宮中央火の見櫓》図面
1923年
フケタ設計蔵
3. 更田時蔵《村山病院》平面図など
1926年
『国際建築時論』2巻11号 [主要参考文献(3)] 所収
4. 更田時蔵《旧・大谷公会堂》竣工当時
1929年
『大谷石 CATALOGUE』[大谷石材採掘販売問屋(組合), 1929~30年頃] 所収
宇都宮美術館蔵

だが、翌年（1962年）に69歳で逝去した。

更田時蔵は、誠実・実直な性格で、緻密さがあり、仕事に対しては妥協を許さない一徹な態度だった。創業当時、建築設計業務は社会から理解が得られなかった。誠心誠意に仕事をしても報酬が得られず、事務所の維持には大変な苦勞を強いられたという。そうしたなかで、毅然とした設計活動を行い、社会に設計事務所^{せきじつしょ}の存在を認めさせる契機をつくった意義は大きい。

西洋建築の意匠や、鉄筋コンクリート造、鉄骨造などをはじめとする新しい建築教育を受けた更田時蔵の作風は、当時^{たとう}の高級技術者が集う官庁の建築部門で磨かれた実力を反映し、本格的なものが多かった。また、諸団体の所属・役員歴は、1929（昭和4）年に日本建築学会正会員、1950（昭和25）年に一級建築士（第3370号）、昭和27年には、栃木県建築士会の設立に発起人の一人として参画、副会長に選出されている。

2. 更田時蔵の主な仕事

フケタ設計の経歴書によれば、更田時蔵は、1923（大正12）年より1961（昭和36）年までの間、栃木県内各所の尋常小学校など、約400件の設計・監理業務に携わった。このうち大谷石関連は、住宅、農業用倉庫など17件である。

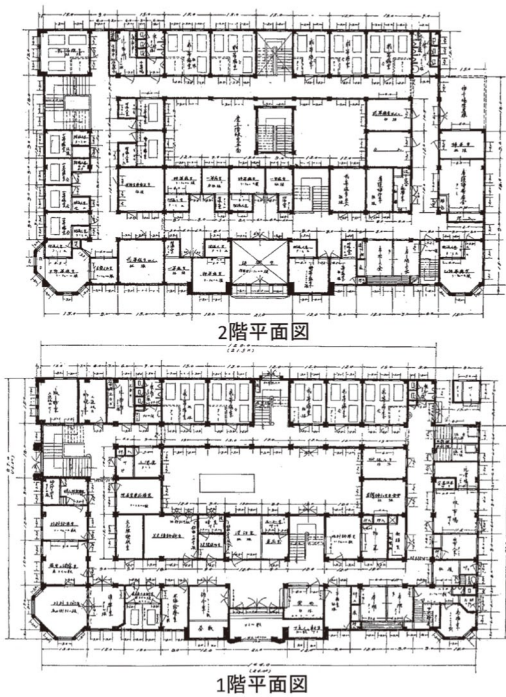
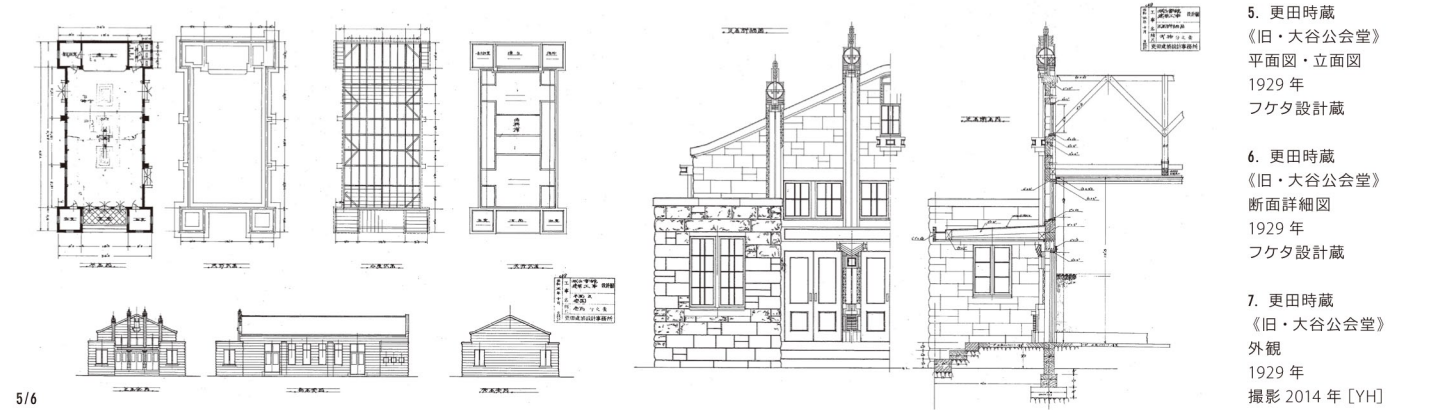
ここでは、建築家としての意気込みを持って取り組んだと思われる30歳台の代表的な作品をいくつか紹介する。すなわち、創業時の仕事として知られる「宇都宮市中央火の見櫓」、当時の先進的な建築雑誌に掲載された「村山病院」、県内に現存する「旧・大谷公会堂」「旧・大内村役場庁舎」「坪山代議士邸」である。

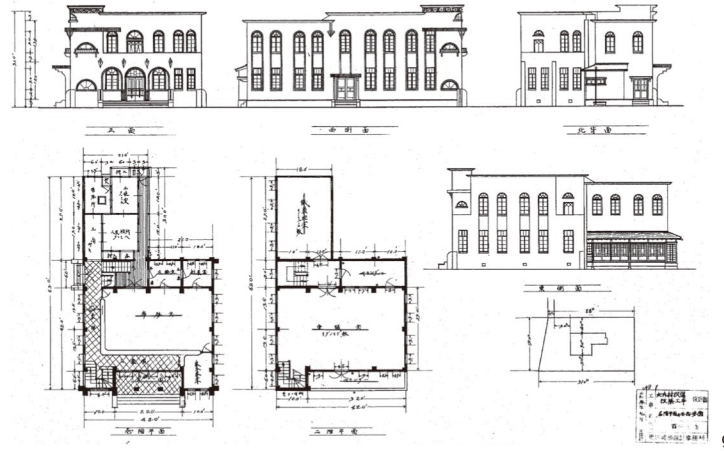
●宇都宮市中央火の見櫓

1923（大正12）年、30歳時の作品。正確な所在地は不明だが、宇都宮市内中心部にあったと思われる。消防車の車庫と消防署員の詰所を兼ねた火の見櫓で、美しく彩色された図面が現存する。

●第3回「大谷石と地域にゆかりの建築家」

[日時] 2014年9月28日（日）
午後2時～4時25分
[内容・講師]
大正年間から昭和戦前に地域で活躍、もしくは業績を残した4人の建築家に焦点を当て、彼らが手がけた大谷石による作品を、近代建築史の眼差しで紹介した。
①スライド・レクチャー「更田時蔵の旧・大谷公会堂」
佐藤公紀氏（建築家、NPO法人大谷石研究会）
②スライド・レクチャー「安美質の旧・宇都宮商工会議所」
藤原宏史氏（建築家、日本建築学会栃木支所長）
③スライド・レクチャー「マックス・ヒンデルのカトリック松が峰教会、上林敬吉の宇都宮聖ヨハネ教会」
橋本優子（宇都宮美術館主任学芸員）
◎対談 佐藤公紀氏×藤原宏史氏×橋本優子（司会）
[聴講者数] 122名





●村山病院（神奈川県横浜市）

1926（大正15）年、33歳時の作品。雑誌『国際建築時論』^{註2）}に掲載された（同年）。以下、同誌の解説を引用する。

「本建築は横浜市山下町に建設されたもので、鉄筋コンクリート2階建1部3階建てである。将来は3階建になるはずである。大正14年5月設計着手、同年11月初旬起工本年9月に竣工。建築敷地は地層2間半以下粘土層である為 inverted foundation とし、全体を鉄筋コンクリート板としてある。各室の配置は病院の依頼によりレントゲン各室を正面にとり、外科各所療室を道路側にとり、且つ、各室とも経済的に取りたるを以て敷地の余裕を有せず、日光浴スローブ階段を取るざりしを云う。本体において採光、通風、床下換気、防火設備等には新設計を施され屋上は庭園に使用されている。設計監督 更田時蔵」

●旧・大谷公会堂^{註3）}（栃木県宇都宮市）

1929（昭和4）年、36歳時の作品。同年4月7日に竣工式を行った旧・大谷公会堂は、当時の帝国在郷軍人会城山分会が大典記念事業として建造したものである。この建築は、我が国の近代建築で唯一、公会堂の用途に供する「石造建築」と位置づけられる。

その構造は積石造、小屋組は木造洋風小屋・キングポスト構造である。大屋根はスレート葺き、陸屋根部分は木造下地にアスファルト防水。床は土間コンクリートで、ステージに向かって下り勾配となっている。単純な平面・断面構成の大谷石造ながらも、近代建築の考え方で設計された建築である。床面積は、竣工当時は196.65㎡だったが、道路拡幅のために一部減築を行い、現在は194.58㎡。階数は平屋建て、装飾柱の高さは設計時が約7.36m、今日では頂部が欠け落ちて6.9mとなっている。

デザインの特徴は、装飾柱の文様にあり、大谷石の装飾的な使い方、その頃に話題を呼んだフランク・ロイド・ライトの「旧・帝国ホテル ライト館」を思わせる。ステージ両側の柱の装飾やドアの六角



形ガラスなども、ライトのデザインをモチーフにしたと考えられる。

以下、1929（昭和4）年4月8日付けの下野新聞に掲載された竣工式の記事を紹介する。

「帝国在郷軍人会城山分会では御大典記念事業として工費6千円を投じ、役場前に名物の大谷石を持って石造スレート葺きの公会堂を建設。工事竣工したので7日午前11時官民有志500余名を招待し落成式を挙げる。一同着席するや中島副分会長より開会の辞を述べ工事報告あり。渡辺城山村長、有富連隊区司令部付少佐、岩崎国本村長、福田富次郎宇都宮市長代理、渡辺村議、鈴木城山校長、渡辺青年団長、大久保区長その他の祝辞あり。閉会后すぐに宴に入り各班奇贈の浪花節その他の余興あり、花火打ち上げ馬鹿囃子などもあり。

あいにくの雨にもかかわらず人手多く盛況であった。ちなみに新築の公会堂は500余名を居るに足り、地方文化の施設として一般民衆に公開するはずであると尚当日表彰及び感謝上を渡辺会長より授与されし者左記のごとし。

表彰者 設計監督技手 宇都宮一更田時蔵
感謝状 敷地寄付者 大宇荒針一松島菊次

●旧・大内村役場庁舎（栃木県真岡市）

8. 更田時蔵《旧・大内村役場庁舎》
外観
1929年
撮影2014年 [KOS]

9. 更田時蔵《旧・大内村役場庁舎》
平面図・立面図
1929年
フケタ設計蔵

10. 更田時蔵《坪山代議士邸》
外観
1932年
撮影2014年 [KOS]



11

年代	世相	更田時蔵	地域 日本 世界
1911年（明治44）		早稲田工手学校（18～20歳）	
1912年（明治45）			
1913年（大正2）			
1923年（大正12）	関東大震災	更田建築事務所創設 宇都宮中央火の見櫓	旧・帝国ホテル ライト館（フランク・ロイド・ライト）
1924年（大正13）			宇都宮大学峰が丘講堂（吉田 静） シュロイター邸（ヘリット・トーマス・リートフェルト）
1925年（大正14）			アール・デコ博（於・パリ） パウハウス・デッサウ校舎（ワルター・グロピウス） [～1926年]
1926年（大正15）		村山病院	
1927年（昭和2）			早稲田大学大隈記念講堂（佐藤功一） 旧・小熊邸（田上義也）
1928年（昭和3）			旧・宇都宮商工会議所（安美賢） 旧・イタリア大使館別荘（アントニン・レーモンド） 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館（今井兼次）
1929年（昭和4）	世界恐慌	旧・大谷公会堂 旧・大内村役場庁舎	バルセロナ・パヴィリオン（ルートヴィヒ・ミース・ファン・デル・ローエ）
1930年（昭和5）			旧・甲子園ホテル（遠藤 新）
1931年（昭和6）			旧・森五商店東京支店ビル（村野藤吾） ザヴォア邸（ル・コルビュジエ）
1932年（昭和7）		坪山代議士邸	カトリック松が峰教会（マックス・ヒンデル）
1933年（昭和8）			日本聖公会 宇都宮聖ヨハネ教会（上林敬吉） バイモアの結核サナトリウム（アルヴァ・アアルト）

12

1929（昭和4）年、36歳時の作品。真岡市飯員^{いひがひ}に建つ昔の役場庁舎は、昭和初期の建築デザインの流れを巧みに取り入れ、更田時蔵が設計に腕をふるった。また、県内に現存する貴重な昭和初期の鉄筋コンクリート造建築であり、真岡市の登録文化財になっている。現在は、郷土資料館（真岡市大内資料館）に転用され、郷土資料の展示や収蔵を担う。鉄筋コンクリート造の部分は保存状態が良い。しかしながら、木造部分は既に無く、基礎石だけが当時をしのばせる。

●坪山代議士邸（栃木県宇都宮市）

1932（昭和7）年、39歳時の作品。宇都宮市の郊外、下欠^{しもかけ}に建つ大谷石造の邸宅で、代議士のゲストハウスとして、母屋の別棟というかたちで建造された。屋敷林に囲まれた敷地にある為、環境条件が良く、美しく装飾された大谷石の窓周りなど、保存状態は極めて良い。アール・デコ様式のステンド

グラスやスパニッシュ瓦ほか、当時の流行を巧みに取り入れた住宅建築である。

3. 同時代の建築と旧・大谷公会堂

以上、更田時蔵の代表作をいくつか見てきたが、彼は、地方に居ながら建築デザイン界における時代の流れを読み取り、巧みに取り入れ、斬新なデザインを展開していた。1923～33（大正12～昭和8）年の建築年表によれば、旧・大谷公会堂が建造された当時は、カトリック松が峰教会をはじめ、さまざまに建築が宇都宮市内に建造され、この地の都市空間が最も輝いていた時代だったと思われる。解体され、既に無くなった建築があるなかで、現存する旧・大谷公会堂などの建物は、宇都宮の都市空間を形成するうえで重要であり、未来への歴史的遺産として大切に考えてゆく必要がある。

さとうこうき（建築家、NPO 法人大谷石研究会）

●筆者（第3回講師）プロフィール
1950年、岩手県生まれ、岩手県立盛岡工業高等学校建築科卒業。
[主な職歴・役職] 1969年、(株)更田建築事務所入社、現在、取締役設計本部長。1992年、社名変更により(株)フケタ設計となる。公益社団法人日本建築家協会会員、NPO 法人大谷石研究会会員など。
[主な作品] 「矢板市文化会館」、集合住宅「栃木県営平松住宅団地」（コンペ最優秀賞）、同「喜連川町営住宅」（プロポーザル最優秀賞）、第4代栃木県庁舎「昭和館」内装復元、「宇都宮大学峰が丘講堂」改修、「旧湯津上村役場庁舎」、「栃木銀行小山支店」、「栃木銀行大曾支店」など。

11. フランク・ロイド・ライト《旧・帝国ホテル ライト館》解体直前
竣工1923年、解体1967～68年、一部移築・復元1976～85年
撮影1967年頃 [HF]

12. 1923～33（大正12～昭和8）年の建築年表

註）
1. 更田時蔵の経歴については、建築史家の岡田義治氏の資料に基づく。
2. 『国際建築時論』は、大正14（1925）年、早稲田大学の建築学科グループ「国際建築協会」の機関誌として創刊され、ドイツ表現主義をはじめとする海外情報を紹介した。その後、『国際建築』となり、1967（昭和42）年まで続いた建築雑誌である。誌面の構成は、海外情報と国内作品の紹介の二本立て。
3. 旧・大谷公会堂の建造の経緯や特徴については、建築史家の岡田義治氏の資料に基づく。

[主要参考文献]
(1) 岡田義治・磯 忍『青木農場と青木周蔵那須別邸』随想舎、2001年
(2) 『国際建築時論』2巻10号、国際建築協会事務所、1926年10月
(3) 『国際建築時論』2巻11号、国際建築協会事務所、1926年11月
(4) 『下野新聞』1929年4月8日